

## 出エジプト記 32 章 15～35 節 「罪を離れ、赦しを求める」

モーセはシナイ山の上に四十日四十夜留まり、主から幕屋に関することばをいただきました。それが終わったとき、モーセは主から驚くべきことを聞きました。民が墮落してしまい、子牛の像を造り、偶像礼拝を行っているということ、そのうなじを固くする民に主の怒りが燃え上がり、主は彼らを絶ち滅ぼすということです。それを聞いたモーセは、主に嘆願し、民のこゝとをとりなしました。契約を守り、約束を実現される神様に、信頼を持って祈りました。すると主はわざわいを思い直されたとあります。罪に対する怒りも神様の正義の現れであり、契約を守られることも神様の正義の現れです。そして、民のためのモーセのとりなしも神様のみこころにかなうものでした。

それでも、この問題はまだ終わっていません。モーセはシナイ山から下りて、民のところに戻らなければなりません。民の悔い改めを導かなければなりません。

### 1. モーセの怒りとアロンの弁解（：15～24）

モーセはシナイ山から下りて行きます。彼の手には主から与えられた二枚の石の板があります。「さとしの板」と呼ばれているように、十戒が記されていたのでしょう。モーセは宿営に戻って行って、民の状態を見ます。金の子牛が置かれ、その前で民は踊り、騒いでいます。聞いてはいましたが、実際に民の様子を見て、モーセの怒りが燃え上がります。手にしていた石の板を投げ捨て、砕いてしまいました。そして、子牛の像を火で焼き、粉々に砕いて、それを水の上に撒いて、その水を民に飲ませました。激しい怒りが表されているモーセの行動でした。でも、それは単にモーセが感情を爆発させたということではなく、主の怒りを表すものだったでしょう。

板を砕いたというのは、民の行動によって十戒が破られていたこと、民が主との契約を破棄していたことを、視覚的に表すことでした。また、偶像を粉々に砕くというのは、民に与えられていた契約の書の中で主が命じていたことです。イスラエルがやがてカナンへの地に入るときには、その地の民の偶像を「徹底的に破壊し…粉々に打ち砕かなければならない」と言われています。それと同じように対処したということです。人の罪に対して正義の神様が怒っておられることがはっきりと示されたのです。

そして、モーセはアロンに問い質します。それに対するアロンの答えは、自分のしたことを隠そうとし、民が悪いのだと言い、神様の導きかもしれないとさへ言おうとしているように思います。これはまさに罪人の姿です。あのエデンの園でアダムとエバが罪を犯した後も同じようでした。神様の問いかけに対して、アダムはエバのせいにし、エバは蛇のせいにし、またアダムはエバを自分のそばにおいた神様のせいにしようとしていました。

本来は、アダムはすぐに自分のした罪を告白して、神様に赦しを求めるべきでした。この時のアロンも、民のしたことだけでなく、自分のしたことをすべて正直に話して、主に赦しを求めるべきでした。

私たちにもこのような罪人の性質があります。問い質されるときに、自分のしたことを隠し、人に責任を転嫁して、言い逃れをしようとし、環境や状況を理由として、神様の責任にしようとし、そのような愚かで悲しい姿を表してしまうことがあります。

### 2. 罪を除く（：25～29）

民の状態は他の民族の偶像礼拝の状態と同じようなものでした。アロンは民が乱れていても「放っておいた」とあります。止めることができませんでした。一方、モーセは民の状態を「敵の笑いものとなっている」と見ました。他の民族が神々に仕える状態と少しも変わらないではないか、と嘲られる状態だということでしょう。モーセは民の罪の行いをやめさせます。そのために厳しい対処を行います。「だれでも主につく者は私のところに来なさい」と呼びかけます。すると、レビ族の者たちが集まりました。彼らにモーセは主のことばを伝えます。その主の命令は、宿営を歩き巡り、罪を犯している者たちを剣で殺せというもの。敵ではなく、「自分の兄弟、自分の友、自分の隣人」の者たちであっても、罪を犯しているならば殺さなければならぬのです。

彼らはモーセのことばどおりに行い、その日、約三千人が打たれました。どうしてそのような厳しいことをさせたのでしょうか。モーセの呼びかけに応じ、命令どおりに行った者たちのことが、「主につく者」「主に身を献げた」と言われています。神、主は正義のお方であり、罪に対して怒り、ふさわしいさばきを行われるお方です。その主の側に立ち、主に仕えて、主のさばきのために彼らは主のことばに従ったのです。

そして、厳しいさばきの背後には、主の愛があることがうかがえます。主は、ご自身のために仕えたレビ族に祝福を与えくださり、そして、イスラエルを祝福して下さろうとしているのです。罪があるままでは主の祝福を受けることはで

きません。主は民が悔い改めるように導くのです。彼らが罪を捨て、罪から離れることを望んでおられ、民を祝福しようとしておられるのです。

この主のみこころは、今も、私たちにも同じように示されています。「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため」(Iペテロ2:24)。「私たちも、一切の重荷とまとわりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか」(ヘブル12:1)。私たちが罪を離れ、罪を捨てて歩むようにと神様は望んでおられます。そして、イエス様によってその道を備え、聖霊によって歩みを助けてくださるのです。そのような歩みこそ主の祝福なのです。

### 3. モーセのとりなし (: 30~35)

民の中から罪を取り除いた翌日、モーセは主のところに戻ります。人が犯した罪に対して、主の前に宥めが行われる必要があるということをモーセは主から教えられています。宥めを行うために動物の血が流され、いのちが献げられなければなりません。そのことを教えられていたモーセは、民が犯した大きな罪のためにも宥めが必要であると考えたのででしょう。「あなたがたの罪のために宥めをすることができるかもしれない」と言います。

モーセはもう一度シナイ山に上り、主に近づいて行きます。そして、再び民のためにとりなしました。民が犯した罪を告白し、その罪を赦してくださるように求めます。「しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください」と求めます。

このことばは、人の生涯のことが神様の書かれた書物の中にあり、その書物に書くのも、そこから消すのも神様の主権によるということを表示していると考えられます。後に、詩篇の中に次のように歌われます。「あなたの目は胎児の私を見られ あなたの書物にすべてが記されました。私のために作られた日々が しかも その一日もないうちに」(139:16)。そして、この神の書という概念は、新約聖書になると救いと結び付けられ、「いのちの書」として語られます。黙示録に「しかし、すべての汚れたもの、また忌まわしいことや偽りを行う者は、決して都に入れぬ。入ることができるのは、子羊のいのちの書に記されている者たちだけである」(21:27)とあります。

モーセは、ささげ物の動物が屠られて、宥めが行われるように、自分のいのちを取り去って、民の罪のための宥めとしてくださるように願ったということでしょう。墮落した民のことを深く愛していたことがわかります。

それに対して主は言われました。罪ある者は主の書物から消し去られます。主が報いる日に、罪の報いをするのは確かなことです。しかし、モーセの名を消し去ることはしない。今は民のところに戻って、民を約束の地に導くと、主は言われます。主はなおもご自身の計画を進めようとされます。イスラエルに対する約束を実現しようとされます。そしてモーセを、なおもご自身が召した働きに就かせ、用いていかれるのです。

モーセのとりなしに表された、民に対する愛に驚かされます。そして、そのことによって示されているのは、やがて来られるキリストによる宥めととりなしです。神の御子であり、人となれたキリストが、罪の全くないお方が、人のすべての罪を代わりに負って十字架で裁きを受けられました。キリストの血によって完全な宥めが行われました。そしてキリストは十字架上でとりなして祈られました。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです」(ルカ23:34)。ご自分を十字架につけた者たちのためにイエス・キリストは祈られました。キリストを十字架につけたのは、当時のローマ兵やユダヤ人であり、また私たちです。私たちのためにキリストは十字架にかかり、祈ってくださいました。そのキリストによる宥めととりなしによって、私たちは罪を赦していただき、救われました。いのちの書に名前が書き記されているのです。

そのようにキリストによって恵みをいただいている私たちは、どのように応答して行ったら良いのでしょうか。モーセに倣うべきことがあるでしょうか。今日の箇所から教えられる一つのことは、罪に対する主の怒りを覚えることです。自分のために偶像を造っていることがあるなら、それは主との契約を破っていることなのですから、その偶像を砕かなければなりません。そして、私たちのうちに罪があるなら、罪を放っておいてはいけません。主の前に罪を告白し、その罪を捨てる決心をし、キリストの十字架を仰ぎ、赦しを求め、そして、罪から解放されるように聖霊の助けを祈り求めましょう。それが「主につく者」「主に身を献げた」者の態度です。私たちの生活の具体的な事柄に、いつもこのことを適用していきましょう。そうすることが主の祝福を受けることとなります。そして、いのちの書に名前が記されていることの確信を得ることにつながります。そして、もう一つ教えられることは、互いのために愛をもってとりなすこと、そして共にキリストの十字架を見上げて行くことです。主の愛をもってとりなして祈る者となりましょう。